浦上の姉さん

キリシタン岩永マキ

2

四番崩れ　比類なき大処分

新政府揺るがす信徒の目覚め

「浦上四番崩れ」は、ひたひたと迫る近代の足音を聞き分けた潜伏キリシタンの「目覚め」が引き金となったのかもしれない。

1858（安政5）年、幕府は米、英、オランダ、ロシア、フランスの5カ国と修好通商条約を結ぶ。アジア進出拡大をもくろむ列強に押し切られる形で締結された条約は、同時に幕府の禁教政策に風穴をあけることになった。横浜や長崎などを開港し外国人居留地を設け、そこで外国人のキリスト教信仰と教会建設を認めたのだ。

64年末、長崎にフランス人神父による大浦天主堂が完成した。現在の半分ほどの大きさで、ゴシック風の塔に金色の十字架を頂き、正面に「天主堂」の大文字が掲げられた。その威容がキリシタンの背中を押す。

浦上の信徒が250年もの潜伏の殻を破った信仰の告白は、この天主堂が舞台となった。

＊＊

落成翌年、3月17日の昼下がり。浦上の男女十数人が現れ、その中の「40歳から50歳くらいの婦人」がプチジャン神父に近づき、胸に手を当てて話した。

「ワレラノムネ、アナタノムネトオナジ（私たちの信仰はあなたの信仰と同じです）」

女性はさらに続けた。

「サンタ・マリアのご像はどこ？」。今も大浦天主堂に伝わるマリア像に祈りをささげる彼らに胸を打たれたのか。プチジャン神父は横浜の神父に宛てたフランス語の書簡に、その部分だけ「Santa Maria gozo wa doko」とローマ字で記した。

＊＊

世界を驚かせた「信徒発見」。以降、キリシタンたちは神父と交流を重ね、信仰を深めていく。浦上の4カ所に秘密教会を建て、ひそかに大浦の神父を招き、ミサや洗礼を行った。その一つが岩永マキ（1849～1920）の家の隣にもあった。

信仰を明かした彼らは禁教に抵抗する。当時、幕府によって庶民は寺の檀徒（だんと）ならなければならず、亡くなれば仏式で埋葬され、自由な葬儀（自葬）は禁じられていた。ところが1867年、浦上でキリシタンの儀式による自葬が続発。彼らは寺との絶縁まで願い出たため、長崎奉行所は摘発に乗り出した。

同年7月15日未明、豪雨の中を奉行所の役人がマキの家に踏み込む。ドンドンと扉をたたく音にまず対応したのがマキだったという。

「ここに異人はおらぬか」

「おりません」

役人が隣の秘密教会へ向かうと、すぐに教会で叫ぶ声、蹴破る音が響いた。様子を見に外へ出たマキの父市蔵が家に戻ると、後を追った役人が胸に潜ませていたマリアのお守りを見つけ、市蔵は連行された。

「四番崩れ」が始まったこの日、四つの教会が手入れを受け、信徒68人が捕縛された。

＊＊

信仰を理由とした投獄を問題視した外国からの要求で、キリシタンの処分は揺れた。発生4カ月後、幕府は大政を奉還。新政府と長崎裁判所に、この難題が引き継がれる。

「当時の九州の統括者らは、リーダー格の極刑を望んだ。しかし、外国からの要求を受け、折衷案を探ることになった」。熊本大の安高啓明准教授（日本近世史）は説明する。結局68年、新政府は名古屋以西の諸藩に信徒を分散し配流する方針を決定した。「このような法律はどこにもない。分配預託は、発足したばかりの新政府だから可能だった。江戸幕府では、あの裁きは下せなかった」

当初の薩長土肥連合政権は基盤が確立されていなかった。「西国に預託を決めたのは、東に比べて薩長の力が及んでいたから。西国を従わせることで政権を支える関係の構築を狙った。浦上の処分は、政治利用という側面があったのではないか」と安高さんはみる。

＊＊

68年、信仰の中心的な114人が津和野などに流され、続く70年、マキら残る信徒が20藩に送られた。配流されたキリシタンは約3400人。浦上のほとんどの住民が対象となる類を見ない大規模処分となった。

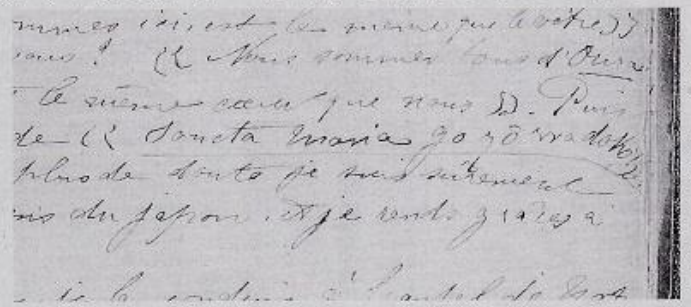
何世代も本心を隠して暮らした信徒たちは、自らをかつての殉教者と重ね合わせたのかもしれない。子どもたちは「パライソ（天国）、パライソ」と口にし、配流の船中でオラショを唱える者もいたという。

キリシタンの多くには、流された先で過酷な運命が待っていた。彼らはその道行きを「旅」と呼んだ。

（藤原賢吾）

※次回は7月2日掲載

浦上の潜伏キリシタンが所持していたマリア観音像。「浦上四番崩れ」の際に没収を逃れたとされる（西南学院大学博物館所蔵）



（写本、長崎純心大学博物館蔵）

プチジャン神父が横浜の神父に宛てた書簡。中央の下線が引かれた部分に「Santa Maria gozo wa doko」と記されている

文化

ファクス 092（711）6243

メール bunka@nishinippon.co.jp

近代百五十年

浦上の姉さん
キリシタン岩永マキ

3

旅 飢えと苦役と拷問と

沖の小島に眠る犠牲者

さざ波さえ立たないひっそりとした瀬戸内海を、滑るようにフェリーは進む。気まぐれに波立つ玄界灘とは大違いだ。船長は真っ黒に焼けた顔をこちらに向けて笑った。

「春の海終日のたりのたりかな。瀬戸内海は、大体いつもこんな感じです」

縦横に並んだカキの養殖筏の間を抜け、大きな島を左に旋回すると、島陰の向こうに見えてきた。

鶴島。岡山県備前市の日生港から約6キロ沖合に浮かぶ、周囲2・1キロの小島である。キリシタンを大量処分した「浦上四番崩れ」で岩永マキ(1849~1920)たちは長崎を旅立ち、1870年、ここにたどり着く。

＊ ＊

処分された約3400人のキリシタンのうち、岡山に流されたのは117人とされ、マキの一家7人もその中にいた。信徒はまず、男性は城下の牢に、女性や子どもは少し離れた寺に10カ月捕らえられた。

食事は劣悪だった。配給を役人がピンはねしたため、男性は1日2合の大麦を生のまま食べ、女性には毎食茶わん2杯の半麦飯程度しか回らなかった。男性たちは雑草を口にした程で、空腹に耐えかねて棄教する者が続出した。

＊ ＊

マキの評伝によると、岡山で4人が亡くなり、鶴島には棄教者を含む残りの113人が流される。当時、雑木や草原の地で開墾が見込まれ、逃亡を防ぐためにもこの島が選ばれたという。

案内役の浜口直樹さん(74)と上陸した海岸から細い山道をゆっくりと登り20分。頂上付近の開けた場所に、いくつもの岩が整然と並べられていた。鶴島で亡くなった信徒たちの墓だ。

浜口さんは、墓前に立つと帽子を脱ぎ、岩に膝を突いて手を合わせた。彼は隣の瀬戸内市に住むカトリック信者で、毎年約280人が祈りをささげる鶴島巡礼に40年にわたり参列している。ここ15年は責任者も務める。「マキさんたちが埋葬したのでしょう。彼女たちの苦しみが忍ばれます」

＊ ＊

マキたちの島での生活は岡山よりも過酷だった。狭い長屋に男女別に押し込められ、1日に男性は8坪(約26平方メートル)、女性は6坪(約20平方メートル)の開墾を課された。雪の舞う冬に、日没過ぎまで作業を強いられたこともあった。さらに、後ろ手で縛られ梅の木につるされたまま、棒やむちでたたかれ棄教を迫られた。

鶴島での2年半の過酷な生活で、評伝によると13人が死亡。ある女性は、便所の踏み板を枕に息を引き取った。71年3月にはマキの父市蔵が、2カ月もたたずに妹フイも亡くなった。どれほどの悲しみを乗り越えたのか。気丈夫なマキは、仲間を勇気づけるため率先して働いた。

＊ ＊

「マキさんたちがいなければ、今の私はなかった」

墓の近くに腰掛け、浜口さんは半生を語った。生まれは長崎・五島の久賀島。生後間もなく五島の奥浦慈恵院に引き取られ、3歳頃まで過ごした。慈恵院は、マキたちと流され、共に児童養護に取り組んだ仲間が一時院長を務めている。

「私は母に捨てられ養子に行った。子どものころ『養い子』といじめられ、つらい思いもしました。それでも、慈恵院に預けられたおかげで今日があります」

養子先の家は「貧乏だったけれど良かった」。働いて、結婚して、3人の子宝に恵まれた。今では6人の孫のおじいちゃんだ。転勤先の岡山に居を構え、五島に帰る度にお土産を手に慈恵院を訪ねた。

＊ ＊

禁教の高札が撤去され、マキたちの帰郷がかなったのは73年。生き抜いたマキの一家5人は皆、信仰を守った。拷問を受け、飢えや病に苦しみ、流された約3400人のうち、600人超が亡くなったという。

それほど過酷な「旅」を終えたマキたちの眼前に広がっていたのは、数年のうちに荒涼となった浦上の姿だった。

＊ ＊

瀬戸内海を望む斜面に並ぶ墓には、せみ時雨さえ聞こえそうな初夏の日差しが注いでいた。浜口さんは、光に包まれた墓を見ながらつぶやいた。「長崎の血が流れている私には特別な場所。私が亡くなったら、ここに埋めてほしい」

犠牲者にささげるためか、そばに立つ記念碑に三好達治の詩が彫られていた。

沖の小島の流人墓地
おぐらき墓のむきむきに
ともしき花の紅は
だれが手向けし山つつじ
(藤原賢吾)

▲岩永マキたち浦上のキリシタンが流された鶴島 =岡山県備前市

鶴島で亡くなったキリシタンたちの墓に祈りをささげる浜口直樹さん。奥には瀬戸内海が広がる

近代百五十年